

# 伊勢湾岸地域における名古屋方面の言語受容

— 『名古屋—伊勢間グロットグラム集』からの考察 —

西尾 純二

## 1. はじめに

1999年、2000年に名古屋市—伊勢市間のグロットグラム（年齢×地域）調査（代表：岸江信介氏）が実施された。2001年刊行の『名古屋—伊勢間グロットグラム集』（岸江ほか編）はその調査報告書である。調査内容は、語彙・音韻・語法・言語意識・アクセントと多岐にわたり、それぞれの質問項目によってグロットグラムは異なった分布を呈する。本稿は、この『名古屋—伊勢間グロットグラム集』を資料として、伊勢湾岸地域における名古屋方面の言語事象の受容について、その様相を明らかにすることを目的とする。

同一地域を対象にした言語地図やグロットグラムの分布が、言語事象によって異なる姿を見せるのは周知の事実である。そして、グロットグラムが示すいくつかの特徴的な分布パターンからは、語史推定の根拠や現時点での方言の動態、方言の区画などについての様々な情報が得られる。今回、考察対象とする伊勢湾岸地域には、木曽三川（木曽川、揖斐川、長良川）があり、それらの河口は伊勢湾北部長島町付近に集中する。これら3つの大河は長年、人的移動の阻害要因であった。そして、日本語方言の大境界線と言われるほど、明確な方言の分布パターンを形成する要因でもある。

いっぽう、『名古屋—伊勢間グロットグラム集』では、木曽三川付近を分布境界としない項目も存在する。名古屋方面の言語事象が木曽三川を越え、南下する様子が数多く見られるのである。さらに、その南下を示すグロットグラムの分布パターンも単純なものではない。グロットグラムでは、隣接地域の方言が、若い世代から徐々に伝播してゆく様子が描き出されることがよくある。しかし、伊勢湾岸地域における名古屋方面の言語事象の受容は、必ずしも、若い世代から現在も徐々に進行しているものとは限らないようである。

木曽三川を越えてある言語事象が南下する。そして、ある地域の全世代で突如、その言語事象が途切れるという現象が生じている。そういった状況にはどのような説明が与えられるであろうか。以下で検証を試みる。

## 2. 三重県内における伊勢湾岸方言の位置づけ

伊勢湾岸地域における名古屋方面の方言受容の様相を論じるにあたって、伊勢湾岸地域の方言的な断絶性と連続性について、まずは確認しておきたい。

榎垣 (1962) では、三重県方言の大区画を北三重方言、南三重方言とし、伊勢湾岸では、その境界を概ね伊勢市と鳥羽市との間に引いた。このうち、北三重方言は北・中伊勢、伊賀方言に分派し、北・中伊勢はさらに北勢と中勢に分派するとされる。ただし、中勢方言の南限が伊勢市付近であることは、掲載された区画図上から明確であるのに対して、北勢と中勢の方言境界は明記されていない。佐藤 (1982) では、日本語語地図 (国立国語研究所 1966~1974、以下 LAJ) をもとに三重県方言と近隣方言との連続性や断絶性を考察し、三重県内の方言を最大7つの分派に分類している。そのうち、伊勢湾岸地域と関係するのはやはり、「北勢分派」と「中勢分派」である。佐藤氏によると、北勢分派は長島町や桑名市を中心とした、中部方言との境界域にあたる。いっぽう、中勢分派は「津市を中核として、いわば三重県域方言内の地方共通語の地位に立つ」とされるが、榎垣 (1962) と同様に、「北勢・中勢・南勢」の分派の境目はさほど画然とはしていない」と、北勢方言と中勢方言の境界線はあいまいであるとの認識が示されている。

北勢・中勢分派に特徴的な言語事象は多岐にわたる<sup>1</sup>。とくに、アクセントは、近年においてもこの地域での動態が検証されている。鏡味ほか (1998) では、これまで桑名市と長島町の間とされていた東西アクセントの境界線が、揖斐川を越え南下している傾向を指摘されている。また、岸江 (2002) では、その東京式アクセントの南下傾向が三重県下全域ではなく、桑名市や四日市市間という東京式アクセントの隣接地域の若年層で起こっていることに着目し、東京式アクセントの南下は共通語化ではなく、名古屋式アクセント化であると位置づけた。

そのほかの言語事象の具体的な姿が先行研究においてどのように捉えられてきたかは、以下の分析のなかで紹介していくことにする。

<sup>1</sup> ここで言われている南勢の代表地点として佐藤氏は、度会郡南勢町を調査している。南勢町は、伊勢湾岸地域とは言いがたく、志摩半島の付け根に位置している。佐藤氏はこれを、伊勢湾岸地域を含む「伊勢分派」の一部として分類している。いっぽう、榎垣 (1962) ではこの地域を、伊勢湾岸を含まない「南三重方言」の一部に位置づけており、区画上扱いが難しい地域である。

<sup>2</sup> なお、北勢・中勢のいずれの方言分派も海寄りと山寄りとはでは、言語的特徴に違いがあるが、今回は伊勢湾岸を沿うように地点をとっているため、海寄りの地域を考察対象とすることになる。

## 3. ツケルとヨソウの攻防

ここでは、伊勢湾岸における、名古屋方面の方言受容のモデルケースとして「(ご飯を茶碗に) ヨソウ、ツケル、モル」を取り上げたい。

図 1

名古屋市-伊勢市間 グロットグラム

項目 盛る(ご飯) part1

質問文 ご飯を茶碗にどうする?

凡例	
△ 37%	↓ 4%
▽ 37%	√ 9%
■ 79%	○ 2%
○ 1%	~ 79%

		世代/地点	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
愛知 県		名古屋市東区	■△	△			○		■	
		名古屋市中村区	△○	△		△		▽		
		佐屋町	~■	△			■	■		
		蟹江町	○	△		~			■△	
		弥富町	■	■	■				■	
三 重 県		長島町北部	△ ■△		■△			■△		
		長島町南部	↓ ○■	△■	△■				■	
		桑名市旧市街	△	○		■			△	
		朝日町	△	△	↓■			△■		
		川越町	~○	△		△			△■	
		四日市市富田		△■ ○■△	△	△		△		
		四日市市旧市街	~	△~	△■			■		
		鈴鹿市	△○	↓		■△				○■△ △
		河芸町	■	↓○△	■△				■	
		津市白塚	△○	▽		▽			△	
		津市柳山	↓▽	○△		△			△	
		香良洲町	△	○	△				▽	
		三雲町	△	↓○△		△				▽
		松阪市旧市街	△○		△	△■			△	
		松阪市駅都田	↓			△			~○■	
		明和町	△	△▽		△			○	
		小俱町	△△		△	△○				△○
		御園村	▽○	○↓△	△				○	
		伊勢市	△○	△			○	○	○	

(4)

図 2

## 名古屋市-伊勢市間 グロットグラム

項目 盛る(ご飯) part2

質問文 ご飯を茶碗にどうする? &lt;テレビに出て改まって&gt;

凡例	↓ ｲﾙ
△ ｺﾝ	～ ｸﾞ
▽ ｺﾝ	★ ｺﾝｸﾞ
■ ｸﾞ	n NR
○ も	

	世代/地点	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
愛知 県	名古屋市東区	■	△			○△		■	
	名古屋市中村区	△	△		△		■		
	佐屋町	■	△			■	○		
	蟹江町	■	△■		～			■	
	弥富町	△	■	○				△	
三 重 県	長島町北部	△		■			△		
	長島町南部	★	■	△				■	
	桑名市旧市街	△○	○		■			○	
	朝日町	△	△	△			■		
	川越町	～	△		↓			△	
	四日市市富田		■	■	△		△		
	四日市市旧市街	～	△	○			■		
	鈴鹿市	△○	↓		■				■ △
	河芸町	n	↓	■				■	
	津市白塚	△	▽		■			△	
	津市柳山	↓	△○		△			△	
	香良洲町	△	△					○△	
	三雲町	△	△		△				■
	松阪市旧市街	↓		△	■			■	
	松阪市駅前田	△			■			■	
	明和町	△	△		△			○	
	小俣町	△ △		△○	△				△
	御園村	○	↓	○				△	
	伊勢市	△	△			○	↓		

### 3. 1 方言としてのヨソウと共通語<sup>3</sup>としてのヨソウ

図1は、ごはんを茶碗に盛る動作を表す形式についての調査結果である。この調査では、特に断りがない限り、友達と話すような気軽な場面での回答を求めている。以下、これを友達場面と呼ぶ。

ツケル (■)・ヨソウ類 (△ヨソウ、▽ヨソル)・モル (◎) の3大勢力が伊勢湾岸に分布している。まずは、ヨソウの分布状況を確認していく。ヨソウ類は中勢地域の高齢層にも回答者が見られる。このことから、この地域に分布が色濃いヨソウは、かつては共通語としてではなく、友達と話す場合に用いられるカジュアルなこの地域のことば (すなわち方言) として存在していたと考えられる。

ただし、中勢方言のヨソウは、世代によって方言とも共通語とも解釈できる。テレビでの発話を想定した場面 (図2) では、名古屋—伊勢間の全体の20代以下で、ツケルが8名、ヨソウが28名となり、ヨソウが地域を問わずツケルを圧倒する状況にある。地域を問わず若年層から一勢に起こる形式の統一は、共通語化によるものと考えられる。

いっぽう、図2の30代以上ではツケル・ヨソウともに21名と拮抗し、地域的分布には緩やかな南北対立が見られる。名古屋側の高い年層ほどツケルの回答が多く、河芸町以南でヨソウが優勢である。この緩やかな南北対立は図1でも見られる。すなわち、この年層におけるヨソウは中勢の地域言語として話されている傾向が認められる。

また、名古屋市—伊勢市間を通じて、若年層にモルが多く回答される傾向がある。これは、ヨソウとツケルとの攻防で混乱が続く中、第三語形として近隣方言のモルを取り込んだと考えられようか。

### 3. 2 切り替え現象に見られるツケルの受容

図1、図2ともに、河芸町以北では、ツケルとヨソウとが混じりあうように分布する。図1では、ツケルとヨソウの複数回答も多く、名古屋市—河芸町地域では両語形が併用される混乱状態が認められる。また、図1のツケルは松阪市の2名を除けば、津市以南では見られなくなり、それに代わってヨソウ類・

<sup>3</sup> ここでは「共通語」を日本語全体の中で規範とされることばとして、「標準語」を話者個人がフォーマルで規範的であると意識していることばとして規定する。したがって、共通語は日本語内で共通のことばであるが、標準語は個人がフォーマルと認識していることばなので、人によって異なることがありうるという立場である。一方、ここで言う「方言」は、「標準語」と対比させたカジュアルなことばの総体、またはその中の一要素である。

モルが分布する。

このような混乱状態の中、テレビ場面(図2)では、複数回答が少なくなり、ツケルとヨソウのどちらかに回答が絞られる。その切り替え状況を整理すると表1のようになる。

表1 友達場面(図1)→テレビ場面(図2)の切り替え

Aパターン※1 (ツケルへの切り替え)				Bパターン※2 (ヨソウへの切り替え)	
名古屋市東区	10代	鈴鹿市	80代	弥富町	70代
名古屋市中村区	60代	同上	40代	同上	10代
蟹江町	70代	河芸町	30代	長島町北部	60代
弥富町	10代	津市白塚	40代	同上	10代
長島町北部	30代	三雲町	80代	長島町南部	30代
長島町南部	20代	松阪市旧市街	70代	朝日町	30代
朝日町	60代	同上	40代	川越町	70代
四日市市富田	60代	松阪市駅田部	40代		
同上	30代				
同上	20代	合計 18 件		合計 7 件	

※1 Aパターン: ヨソウ(友達)→ツケル(テレビ)。または、ヨソウ・ツケル併用(友達)→ツケル(テレビ)の切り替えパターン。

※2 Bパターン: ツケル(友達)→ヨソウ(テレビ)。または、ツケル・ヨソウ併用(友達)→ヨソウ(テレビ)の切り替えパターン

ヨソウがテレビ場面で不適切とされるAパターンは、明和町以南を除くほぼ全域に存在する。これに対して、ツケルがテレビ場面で不適切とされるBパターンは、Aパターンよりも出現数が少なく、地域的にも愛知県側と北勢地域に分布が限定されている。

より詳しく見ると、友達場面でツケルが2件のみであった津市—松阪市間で、Aパターンを含めたツケルへの切り替えが6件(松阪市駅田部 70代を含む)あることも注目してよい。つまり、この地域ではテレビ場面のほうが、友達場面よりツケルの出現が多くなる。津市—松阪市間では、名古屋方面のツケルがカジュアルな場面では使われにくい「テレビ向け」の標準語的な意識をもって受容されているのである。この点、ツケルとヨソウが両方とも友達場面で回答される名古屋—河芸間とは異なっている。

なお、Aパターンの切り替えの南限は松阪市となっている。さらに、明和町—伊勢市では、モルがヨソウと混ざって分布するが、友達場面でもテレビ場面でも名古屋方面のツケルは分布しない。これらから、標準語的存在としてのツ

ケルの受容は松阪市付近までで止まっているものと思われる。

また、友達場面でもテレビ場面でもツケルだけを使用し、切り替えないパターンも存在する。その地点と年齢層は次のとおりである。

名古屋市中区 70 代、佐屋町 50 代、弥富町 20 代、長島町南部 70 代、桑名市旧市街 40 代、四日市市旧市街 60 代、河芸町 70 代 計 7 件

北部・高年層にやや偏った分布であるが、これらは名古屋方面のツケルが方言として認識されていないケースであると考えられる。

弥富町一川越町間で B パターン（ヨソウへの切り替え）の切り替えが集中することも興味深い。この地域は B パターンのほかに、A パターンやツケル（友達）→ツケル（テレビ）という切り替えなしの回答パターンも見られ、複雑な切り替え状況を呈する地域である。このようにスタイル的にツケルとヨソウの位置づけがはっきりしないのが、弥富町一川越町間なのである。

この地域は、友達場面（図 1）においてもツケルとヨソウが交じりあった分布を呈している。このような混乱のなかにあるからこそ、ヨソウとツケルのいずれが方言・共通語であるのかの判断にも混乱をきたすため、この地域では A、B 両パターンの切り替えが存在していると解釈できる。

### 3. 3 名古屋方面の形式ツケルの受容パターン

これらの状況を整理すると、名古屋方面・北勢中勢という地域的対立と、標準語意識というフォーマリティの対立とから、名古屋方面の形式受容には次のような地域差が確認される。

- a. 名古屋方面のツケルが気づかれない方言として友達場面でもテレビ場面でも回答される地域。（北部高年層中心）
- b. 名古屋方面のツケルとヨソウのいずれが標準語であるか判断が揺れる地域。（弥富町一川越町間）
- c. 名古屋方面のツケルはテレビ場面で回答されるが、ヨソウはテレビ場面でも友達場面でも回答される。つまり、ツケルは標準語として認識されるが、その認識が希薄になりつつある地域。（名古屋一河芸町間）
- d. 名古屋方面のツケルの受容度は低い、使われるときは標準語として認識され、友達場面では使われにくい地域。（津市一松阪市間）
- e. 名古屋方面のツケルは標準語としても方言としても進入していない。使用形式はモルである地域。（明和町一伊勢市）

これらの受容パターンにおいて（ ）内に記した地域は、むしろ質問項目によって変化するものであり、相対的にとらえるべきであろう。しかし、これらのパターンから、名古屋方面のことばの受容には、いくつかの段階が存在して

(8)

いることを見て取れる。

その段階を上記、a～e の状況と関連させた上で大きく捉えれば、「未受容 (e)」「不完全な受容 (c, d)」「混乱 (b)」「安定的受容 (c が進行し標準語意識がなくなり、カジュアルな方言として根付く)」となる。

また、このように名古屋方面の方言が木曽三川を越え、伊勢湾岸地域に影響を与える様相から、ほかの言語事象にあっても、名古屋方面の方言が木曽三川をまたぎ、より南部にまで進出していることが予測できる。そして、どの地域までが名古屋方面の方言を受容しやすいのかという、伊勢湾岸地域のより詳細な方言分派を論じる必要性が生じてくる。

## 4. 木曽三川をまたぐグロットグラムの分布パターン

### 4. 1 揖斐川付近での分布

鏡味ほか (1998) や岸江 (2002) では、三重県側の伊勢湾岸地域、とりわけ揖斐川を越えた桑名市や、四日市市の若年層で伝統的京阪式アクセントが消え、名古屋方面の東京式アクセント体系が南下してきていると分析されている。『名古屋—伊勢間グロットグラム』でも、図3のように長島町までは全世代に分布する名古屋方面のアクセントが、揖斐川を越え桑名市や四日市市の中若年層に進出するパターンが見られる。アクセントは体系的に移行するため、他の語彙のアクセントでもこの分布パターンは数多く認められ、枚挙に暇がないほどである。

ただ、アクセント以外で、このような揖斐川を越えての南下が、現在進行中であると認定可能な言語事象を見つけるのは容易ではない。そのような傾向が顕著に見られるのは、待遇表現の「(腹立たしさを込めて) 行った」に回答されるイッテマッタぐらいである<sup>4</sup>。

逆に中勢地域の方言形式が、揖斐川を越えるような分布を見せるケースは、太田 (2001) が指摘した否定辞のーへん、程度副詞「とても」のメッチャ、勧誘「行こう」「行かないでおこう」のイコニ、イカントコニなどまとまって見られる<sup>5</sup>。

これらは、木曽三川、とりわけ揖斐川を越えて、南北の方言が行き来する様

4 「汚い犬に餌を与えようとしたが、無視して向こうに行った」という文脈での回答。「行ってしまった」を意味するため、アスペクト項目として調査を実施するとより分布が明確になるものと思われる。

5 かつては、名古屋方面と同形の方言であった中北勢地域のことばが、中勢地域から北勢地域に向かって新しい形式に更新されてゆく様子がいくつかのグロットグラムから確認される。この点についての詳しい考察は稿を改めたい。



子を看取できる状況である。しかし、木曾三川が名古屋方面の方言と伊勢方面の方言との境界線として、現在もなお大きく立ちはだかっていることもまた明確である。図4のように、伊勢方面の方言が長島町付近で突如途切れるケースは、否定辞ヘンの分布やアクセント2拍名詞の項目などに数多く見られる。

しかも、これらの形式やアクセントは、全世代にわたって木曾三川付近で分布が途切れるという特徴を持っており、隣接地域への伝播が厳しく阻まれている様子を示している。

図3

名古屋市－伊勢市間 グロットグラム

項目 籍が

凡例

★ HH

○ LH

	世代／地点	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
愛知県	名古屋市東区	○	○			○		○	
	名古屋市中村区	○	○		○		○		
	佐屋町	○	○			○	○		
	坂江町	○	○		○			○	
	松置町	○	○	○				○	
三重県	長島町北部	○					○		
	長島町南部	○	○	○				○	
	桑名市旧市街	★	○		★			★	
	朝日町	○	★	★			★		
	川越町	○	★		★			★	
	四日市市富田		★	★	○		★		
	四日市市旧市街	★	○	★			★		
	鈴鹿市	★	★						★
	河芸町	○	★					★	★
	津市白塚	★	★		★			★	
	津市柳山	★	★		★			★	
	香良洲町	★	★	★				★	
	三響町	★	★		★				
	松阪市旧市街	★		★	★			★	
	松阪市駅前田	★			★			★	
	明和町	★	★		★			★	
	小俣町	★	★	★	★				★
	御蔵村	★	★	★				★	
	伊勢市	★	★			★	★		

図 4

名古屋市-伊勢市間 グロットグラム

項目 行かないだろう-推量 (否定事態) -part2

質問文 「明日はあの人をあそこへ行かないだろう」の「行かないだろう」をどう言いますか。Part2

凡例	★ ｲｾﾝ
○ ｲｵﾝ	★ ｲｵﾝ
● ｲｵﾝ	★ ｲｵﾝ
● ｲｵﾝ	
○ ｲｵﾝ	

	世代/地点	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
愛知県	名古屋市東区								
	名古屋市中村区								
	佐屋町								
	蟹江町								
	弥富町								
三重県	長島町北部								
	長島町南部		○					●	
	桑名市旧市街	●			○			○	
	朝日町								
	川越町	○●	●		●○				
	四日市市富田		○				○		
	四日市市旧市街	○	●○★	●○			○		
	鈴鹿市	○	○●		○				●★
	河芸町	○		★★				●	
	津市白塚	○	○●		●			○●	
	津市柳山	●	●		●				
	香良洲町	○	○	★●				○	
	三雲町	○	○		●				
	松阪市旧市街	○●		○	○			○	
	松阪市駅前田	○			●			○	
	明和町	○	●		●○			○	
	小俣町	○		●	●				○
	御園村	●	●	★				●	
	伊勢市	●				●	●		

## 4. 2 ガ行鼻音の消滅

ガ行鼻音の場合、これまでもいくつかの調査報告があるが、報告によって結果のずれがある。LAJ では愛知県西部に点在する以外は、愛知県にガ行鼻音は分布していない。しかし、樫垣 (1962) や佐藤 (1982) では愛知県内でのガ

行鼻音の存在が報告されている。いっぽう、芥子川(1983)では、かつては名古屋市の西部で鼻音があったとされているが、報告当時は聞かれないとしている。これに対して、『名古屋—伊勢間グロットグラム』調査の結果は、図5のとおりである。このような分布パターンはガ行鼻音の6項目(鍵、嗅ぐ、上げる、顎、ひげ、鏡)全てに見られるものである。

図5

## 名古屋—伊勢間 グロットグラム

項目 ひげ

質問文 ガ行鼻音 「ひげ」 男性が毎朝剃るもの。(2度発音)

凡例

- △ g  
◆ ng  
◇ g, ng

世代/地点		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
愛知県	名古屋市東区	△	△			△		◆	
	名古屋市中村区	△	△		△		△		
	佐藤町	△	△			◆	◆		
	蟹江町	△	△		△			◆	
	弥富町	△	△	△				◆	
三重県	長島町北部	△		△			△		
	長島町南部	△	△	△				◆	
	桑名市旧市街	△	△		△			◆	
	朝日町	△	△	△			◆		
	川越町		△		△			◇	
	四日市市富田		△	△	△		△		
	四日市市旧市街	△	△	△			◆		
	鈴鹿市	△	△		△				△
	河芸町	△	△	△				△	
	津市白塚	△	△		△			△	
	津市柳山	△	△		△			△	
	香良洲町	△	△	△				△	
	三雲町	△	△		△				△
	松阪市旧市街	△		△	△			△	
	松阪市駅部田	△			△			△	
	明和町	△	△		△			△	
	小俣町	△	△	△	△				△
	御園村	△	△	△				△	
	伊勢市	△	△			△	△	△	

榎垣 (1962)、佐藤 (1982) 芥子川 (1983) にもとづけば、このグロットグラムは、伊勢湾岸全域に広がっていたガ行鼻音が、全国的傾向と軌を一にして中勢地域から消滅し始めたことを示していることになる。さらに、中勢方言が近畿方言の影響を受けやすいことを考慮すれば、ガ行鼻音の消滅は近畿方言の影響であるという可能性も考えなければならない。

いっぽう、名古屋方面では、その消滅のスピードが中勢地域とは異なり、50代以上の世代でガ行鼻音の回答が残存している<sup>7</sup>。ここに三重県側と愛知県側の方言の異質性が見られる。名古屋方面の方言圏は、全国的に進行しているガ行鼻音を三重県側の方言よりも40年～50年程度長く保持していたのである。その名古屋方面の方言の特徴が、四日市市あたりにまで及んでいることにも注目してよい。これは、名古屋方面の方言保持における四日市市の位置づけを示唆する現象である。あと20年調査が遅れていたなら、ガ行鼻音のこのような状況は捉えられなかったであろう。

ただし、ガ行鼻音の消滅が全国的に進行していることには注意が必要である。図5では40代以下の世代で、一斉にガ行鼻音が消失している。地域的に徐々にガ行鼻音の消滅が進行した形成がない。名古屋市から四日市市にかけての地域でのガ行鼻音の消滅は、この世代で全国的な傾向に合流したと見られる。

## 5. 中勢南部地域の特性

名古屋方面の方言受容という点からは、中勢南部はやや特殊な位置づけを持つ。もっとも、中勢南部という区画にどの地域を認定するかについては、いまだ資料が十分ではない。しかし、グロットグラム上、隣接する地域との連続性を持たず、断絶する形で分布が形成されるケースが中勢南部には見られる。図6は、順接の接続助詞の「～するから」に、「～するヨッテ」を用いるかどうかを示したものである。

図6からは松阪市以南で、志摩方言に使用の報告がある(佐藤1982)～ヨッテが集中的に分布している。アクセント項目においても、3拍名詞「二人」「二人を」などに類似する傾向が見られる。

このような松阪市付近から伊勢市にかけて、特定の言語事象が集中するケースは少なくない。痣の項目でも同様のことがいえる(図7)。名古屋市から三雲町まではクロジ系とアオジ系の形式が広く分布し、若年層からアオジが徐々に

6 ガ行鼻音がこの地域一帯に存在しないというLAJの調査結果からは、『名古屋—伊勢間グロットグラム』のこの状況を説明するのは困難である。

7 ほかのガ行鼻音の項目では、わずかに40代にも回答が見られる。

優勢になっていく様子がうかがえる。しかし、香良洲町以南では、そのようなクロジ→アオジへの交替という潮流に巻き込まれず、アザという形式が比較的安定して各世代で回答されている。図1の「ご飯を茶碗に盛る動作」においても、明和町以南に名古屋方面の形式であるツケルの進入が見られなかった。

図6

## 名古屋市-伊勢市間 グロットグラム

項目 (食べ過ぎる) ヨッテヤの確認

質問文 お腹が痛い家族に「食べ過ぎるからだよ」というとき「食べ過ぎるヨッテヤ」と言いますか。

## 凡例

- 使う
- + 聞いたことがある
- / 使わない・無回答

世代/地点		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
愛知県	名古屋市東区	/	/			/		/	
	名古屋市中村区	/	/		/		/		
	佐屋町	/	/			/			
	蟹江町	/	/		/			/	
	弥富町	/	/	/				/	
三重県	長島町北部	/		/			/		
	長島町南部	/	/	/				/	
	桑名市旧市街	/	/		/			/	
	朝日町	/	/	/			/		
	川越町	/	/		/				
	四日市市富田		/	/	/		/		
	四日市市旧市街	/	/	/			/		
	鈴鹿市	/	/		/				/
	河芸町	/	/	/				/	
	津市白塚	/	/		/			/	
	津市柳山	/	/		/			/	
	香良洲町	/	/	+				/	
	三雲町	/	/		+				/
	松阪市旧市街	/		/	/			/	
	松阪市駅部田	/			/			●	
	明和町	+	/		/			●	
	小俣町	+	●	●	●				●
	御園村	/	●	/				/	
	伊勢市	●	/			●	●		

(14)

図 7

名古屋市-伊勢市間 グロットグラム

項目 青あざ

質問文 ぶつけて内出血して青黒くなること。何ができる？

凡例	▽ 71777	□ 71777	∩ 717
△ 7177	< 7177	⊕ 7177	7177
▽ 7177	■ 7177	# 7177	* 7177
▽ 7177	◆ 7177	○ 717	~ 7177
▲ 7177	◇ 7177	∫ 7177	

	世代/地点	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
愛知県	名古屋市東区	○△	△			○		■	
	名古屋市中村区	△	△		■△		~△		
	佐屋町	△	<△			◇	○		
	蟹江町	△	○△		○			■○#	
	弥富町	△	∫	■				∩	
三重県	長島町北部	△		▲◇			□/		
	長島町南部	△	△	■				○▽	
	桑名市旧市街	△	△		○▽			▽	
	朝日町	*	△	▽			○■		
	川越町	△	△<		△			△	
	四日市市富田		△	■	△		7○		
	四日市市旧市街	■	△	■△			○		
	鈴鹿市	△	△■		■				○
	河芸町	△	○∫△	■				■	
	津市白塚	△	■		■			⊕■	
	津市柳山	△	∫<		■			○	
	香良洲町	○▽	◆<	▽				◆	
	三雲町	○	△		▽				○▽
	松阪市旧市街	△		△	▽△			○	
	松阪市駅前田	○			○			○	
	明和町	○	○		○△			∫	
	小俣町	○	▽	○	○				○
	御園村	▽○	<	▽				○	
	伊勢市	○	▽			▽<	○		

これらの現象で注目したいのは、松阪市以南の形式が、津市以北の中若年層に伝播してゆく傾向が希薄なことである。津市以北に侵入せず、全世代で安定した分布を呈している。逆に、松阪市以北の形式を徐々に受容する様子も見えにくい。

このことは、松阪市以南地域が名古屋方面の形式の受容が及びにくく、やや

独立性の強い方言分布域であることを示唆している。

## 6. まとめ

名古屋方面の方言形式が北中勢地域に南下する場合、伊勢湾岸地域には、名古屋方面の方言形式の南下が及びにくい地域が存在していることが明らかになった。従来から指摘されてきた木曾三川は、依然として大きな言語的断絶要因として立ちはだかっている。しかしながら、今回の『名古屋—伊勢間グロットグラム』の分析から、さらなる詳細な方言の連続性と断絶性が見えてきた。

今回、提示したグロットグラムでは、若い世代から徐々に新しい形式が隣接地域に伝播するというパターンは、アクセントを除いては紹介しなかった。しかし、そのような若い世代からの他地域への伝播が見られず、全ての世代において隣接地域と異なる形式が分布するという状況は、方言連続の断絶性を浮き彫りにしている。

ガ行鼻音のように、木曾三川を越えた四日市市周辺で分布が変化するパターンや、ツケルやアザなどのように、同じ中勢地域でも松阪市から伊勢市にかけての地域では、名古屋方面の形式の影響を受けにくいという実態は、伊勢湾岸地域の方言分布の断絶性を示していると言ってよい。このような断絶性は、この地域におけるアクセントのように、若い世代から段階的に東京式が南下する分布パターンからは、判断が難しい。

また、ツケルの受容は、スタイルの軸と関連して、連続的に南下していることも確認された。

このことは、三重県方言の各地域の特徴を明らかにしようとする際の、調査地点取りの参考にもなると思われる。たとえば、中勢分派というくくりで代表地点を取る場合、その地点が鈴鹿市や津市などに偏ると、対象とする言語事象によっては、松阪市や伊勢市が異なる言語的特徴を有している可能性を、今回の分析から指摘できる。

本稿では、名古屋方面の方言形式の受容という観点から論を展開したが、中勢地域の方言形式が伊勢湾岸に伝播する様子については分析が及ばなかった。中勢地域の方言が北上する様子は確かに見られる。しかし、この点については稿を改めることにする。

[にしお じゅんじ 1995年3月卒業]

## 参考文献

- 模垣 実 (1962) 「三重県方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 太田有多子 (2001) 「否定辞「ない」から名古屋—伊勢間の言語特徴を探る」『地域語資料6 伊勢湾岸西部地域の社会言語学的研究』近畿方言研究会
- 鏡味明克・新良智子・岩田千晶・小野田良香 (1988) 「三重県アクセントの年層変化—松阪・四日市・桑名および桑名周辺について—」『名古屋・方言研究会会報』15 名古屋・方言研究会
- 岸江信介・太田有多子・武田拓・中井精一・西尾純二・半沢康 (2001) 『名古屋～伊勢市間グロットグラム集』私家版
- 岸江信介 (2001) 「桑名—伊勢間にみられる2拍名詞第4・5類のアクセント変化」『伊勢湾岸西部地域の社会言語学的研究』地域語資料6 近畿方言研究会
- 岸江信介 (2002) 「名古屋市—伊勢市間にみられるアクセント変化の動向」『地域語研究論集—山田達也先生喜寿記念論集』港の人
- 芥子川律治 (1983) 「愛知県の方言」『講座方言学6 中部地方の方言』国書刊行会
- 国立国語研究所 (1966～1974) 『日本言語地図』1～6 大蔵省印刷局
- 佐藤虎男 (1982) 「三重県の方言」『講座方言学7 近畿地方の方言』国書刊行会